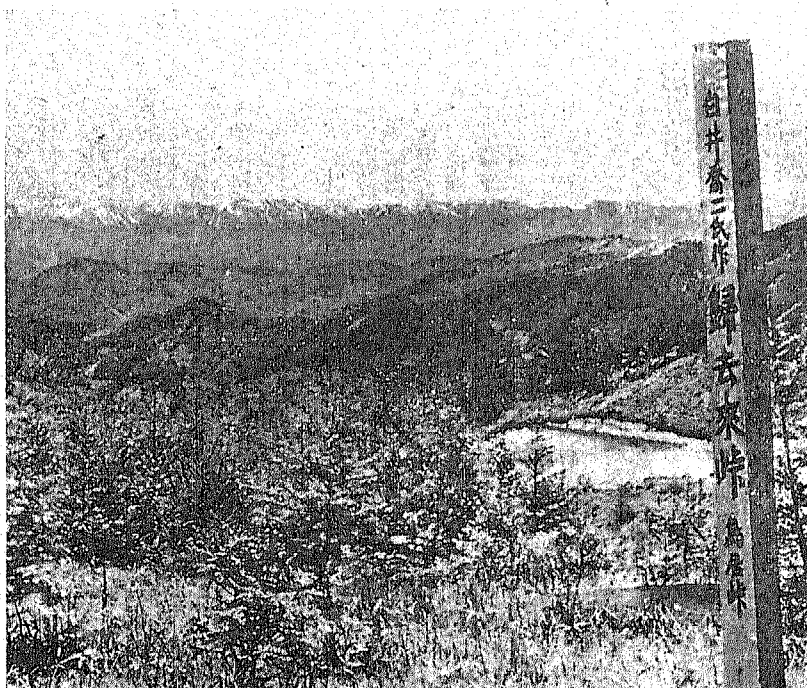


報會曲千

日五十二月十年七十和昭

號 一 十 二 第

會曲千人法團社



目次

- △産業報國精神……………大倉邦彦(二)
- △「鱗翅目幼虫の吐絲管に關する研究」概要……………中島 茂(三)
- △科舉點描(6)……………(四)
- グイタミンの種類
- 燈火管制とグイタミン
- 鶉卵の新古鑑定法
- △第三十回卒業證書授與式舉行……………(五)
- 井上校長式辭
- 第三十回卒業業者氏名
- △いちご風景(其二)……………碓氷 茂(六)
- △母校便り……………(七)
- 野外教練
- 小松教授滿洲支那へ出張
- 野口教授歸校
- 松高と射撃試合
- 小林敏講師退職さる
- △地方通信……………(七)
- 大邱千曲會臨時總會記
- △本會記事……………(七)
- 本會日誌
- 支會役員異動
- 遠藤先生退官記念品受領報告
- 會費領收
- △敍任辭令……………(八)
- △訃報……………(八)
- 弔慰金募集
- 弔慰金報告
- △會員動靜……………(九)

大東亞戰爭の完勝と大東亞共榮圈建設の必成を目指して邁進しつゝある現下、母校に於ては過ぐる九月二日我が國精神文化界の權威者大倉邦彦氏を招聘せられ二時間に亘る産業報國精神特別講義を開催された。職員學生一同氏の愛國的熱辯を拜聴し大いに感銘する所あつた。以下は其の抄録である。

産業報國精神

大倉精神文化研究所長

大倉邦彦

民族或は國家の一度興隆せる國民は如何なる國の人間でも、その國の歴史性なり民族の傳統なりを持たない國民はなからざるの國民はそれのの世界觀、人生觀を持つものである。

例へば支那の哲學はどうかと云ふに、有名な儒教なるものは決して一般的なものではなく之は智識階級の特教であり、支那人一般の哲學は道教であり隨順するといふ事、換言すれば無爲にして化する事、即ち仕方なし主義である。従つて非常に辛棒強いのである。例へば清朝は滿洲から出て二百年にして又滿洲に歸へつたので、今戰つてゐる日本軍も待てばやがてはかへつて行くだらう位に思つてゐてすこぶる香氣である。従つて彼等の生活力は根強く、南方華僑の財産四〇億、人口八百萬、第一二世を合はせると千七百萬人はあり彼等の中には三井、三菱にも匹敵する財を持つて居る者も居るがもとは皆裸一貫から蓄積し百萬の富を築いた者である。

又、山西省には地下資源は非常に多いが、此等のものを考へず何れも勤勉貯蓄に依り財を蓄へた金持が多く支那の財産家の九割九分迄山西に居る支那人が占めてゐるさうである。併しながら彼等は國

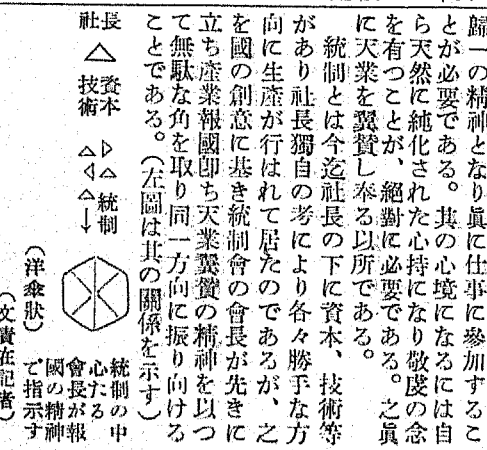
家觀念が無く實業性はあるが政治性の持合せは殆どない。次に印度人の哲學は何うかと云ふに佛敎にあらずして、所謂印度教である。自分の悩みを取り去つて生活を安樂にすることを考へるが、國家の事は考へない。印度の歴史も相當古いが其の間獨立せることは二回あるのみである。ヨーロッパ人の哲學は何うか、彼等の中には學問としての哲學を勉強する人は早くより現はれたが、彼等一般人の持つ哲學はギリシャ哲學に非ずして、人間平等主義であり、個人主義であり、自由主義である。彼等は幼稚園の頃より「私に一つお前に一つ」と教はつて居る彼等は社會を住みよくすることは各個人が自由になることであると考へて居り、従つて株式會社の國家の存立を見るに至つたのである。

が國の國語を英語にしやうと考へる人さへ出た。大正の末期は共產主義禮讚で經濟も、法律も、憲法も何から何まで共產主義化した。又福澤諭吉氏は「學問のすゝめ」と云ふ書物を表はし當時二十萬冊も賣れたが、外國の自由思想を取り入れたもので、人間は平等であるが學問に於れば偉くなる云ふ事を説き忠孝論に於ては封建時代に於ては忠孝は一致せず補正成は漢川で討死すべきものでなかつたと云ふ様な事までも述べて居る。其の中には明かに西洋人の思想がある。

明治十二年 明治天皇東北に御巡幸の折、外國翻譯の修身の本を其儘教へて居るのを御覽になり其の誤謬を指摘せられ「敎學の大旨」を發布され敎育の本旨は仁義忠孝を本義とすべきである事を御示しになられた。残念ながら當時は其の効果が表はれず昨年になつて國民學校令の施行によりやつと其の御趣旨が認められて来た。それは國民精神を本義とする皇國民の練成であつて自然に國から離れた個人を敎育するのではないのである。併しながら國民學校より大學迄の各階程を考へて見る時の趣旨は未だ徹底され居ない感がある。産業報國精神も亦同様で未だ個人を夢見て居る者があり完全に徹底してゐない。明治十九年ドイツ人ドクトルグロト氏は第一高等學校に於て西洋歴史のみを敎へて居るのを遺憾に思ひ日本歴史を敎へる事を建白した之が高等學校に日本歴史教育を探り入れた始めである。又ドクトルレス氏は日本は立派な國でありながら大學に日本歴史科のないのを嘆き歴史科を設けることを申し出た。以上は敎育方面の歐米禮讚の二、三の欠點を述べたのであるが産業方面に於ても同様の事が見られる。

明治五年歐洲の形態に依る株式會社なるものが始めて出来た。之が王子製紙會社である。其後アダムスミスの富國論が出た。之は個人の欲望を満たし快樂を求

めることを第一主義としたものでこの影響を受け當時の經濟は非常に墮落した。次にマルクスの資本論が出て其の影響を受け福田德三氏の經濟原論が出て、企業は生産が根源をなすものであり生産には土地、資本、勞力が必要であり之によつて利潤を得ると云ふので勞働なるものも考へ方が違つて居た。従つて人間は附はれて苦痛を忍んで金を得る。會社も亦自分の利益を得ることのみに専念する。其處で勞働者との間に色々の反對現象が起つたのである。併しながら現今は國家の創意と精神に従つて事業の經營を行ふことが必要である。佐藤信淵、二宮尊徳等は昔より經濟は國土經營であり萬民を輔けたが當時さうした思想は全く容れられなかつたので、何んでも世の中と反對の事を言へると説いた程である。



(洋傘狀) 國の精神 (文責在記者)

宮崎高等農林學校に奉職中の中島茂氏には、左記首題の論文を豫て東京帝國大學に御提出中の處去る七月十六日同學農學部教授會を通過し、九月九日付を以て同大學より目出度く農學博士の學位を授與せられた。

同氏は養蠶科第十一回の卒業者にして、夙に研鑽を積まれ今日の榮譽を獲得せられたものである。紙上を以て御慶祝申上伏、一層の御發展を祈念する次第である。

こゝに該論文の概要の御執筆を乞ふて左に紹介する次第である。

『鱗翅目幼虫の吐糸管に關する研究』概要

宮崎高等農林學校 中 島 茂

家蠶の吐糸管に關する研究は、筆者が養蠶科卒業後母校養蠶部助手として蒲生蠶體生理解剖學教室にて蒲生先生の御指導を仰ぎたる當時の着想であり其の後遠藤生物學教室に囑託として蠶桑害虫の講義を擔任して野生絹絲虫類の上に該研究の視野を擴め、更に宮崎高等農林學校に轉勤の後は蠶絲學の外に動物學並に昆虫學を擔任し、爾來十五年の間廣く一般昆虫類に吐糸昆虫類に重點を置き比較研究に當つてゐたものである。

然る處去る昭和十四年文部省内地研究員として一箇年間、東京帝國大學農學部動物學教室に於て鏑木理學博士の御指導の下に表題の「鱗翅目幼虫の吐糸管に關する研究」として研究の續行總括に専念するの機を得たるを以て之を主論文とし「家蠶の臭氣に對する反應」外八論文を副論文として、過日東京帝國大學に提出したのである。從て之等論文の完成は前校長針塚長太郎先生、現校長井上柳梧先生、前教授遠藤保太郎先生並に蒲生俊興先生を始め、母校諸先生の陰に於ける絶大なる御指導御援助の賜であると共に、

同窓各位の不斷なる御支援に依るものである。今茲に論文の概要を報ずる機會を與へられたるに際し、謹んで深甚なる謝意を表し、併て今後の御垂教、御援助を仰ぎ度く切に御願ひする次第である。

吐糸昆虫の營巢性並に吐糸習性特に吐糸管の形態及び機構の究明は、學術上並に應用上緊要なる問題であるにも拘はらず、從來の研究は極めて少い。筆者は本研究に於て吐糸管の外部形態が分類學的に種の特徴を表示するものなることを基礎とし、鱗翅目の二七科六六種に就き、幼虫の下口複合體を比較検討して、吐糸管は其の形態上八型に類別せらるゝことを指摘し、進んで其の吐糸管の各型と營巢性との關係を考究し、又繭並に絹絲への關聯に論及し、更に筆者の創案である絹絲の人工吐出法に依り、熟蠶より直接絹絲を牽引吐させ、絹絲の缺點とされてゐる織度斑並に類節等の成因に關する研究の結果を得たもので、夫れ等の要旨を述べれば次の如くである。

一、吐糸管の形態

1 吐糸管は一時性器官にして、下唇と

下咽頭との境界部に發達し、下唇莖節、下唇前莖節及び下唇鬚とに依りて吐糸管複合體を成し、後胚子的發生を通じて種の特徴を保持表現するものである。

2 一般に吐糸管は長圓錐形又は圓筒形を呈し、基管部と管部とに分かれるが其の基管部には硬皮環及び間膜が見出され又、管部には腹硬皮帶、側硬皮帶、頂刺頂胞、管袖及び吐糸口等が多くのもので於て識別される。

3 吐糸管は管型式により其の特徴を比較して八群に類別し、各々の中の主要なる屬名を附して次の八型とすることが出来る。



中島茂氏

- (1) Phassus type: かうもりが
- (2) Hypomoneta type: まゆすみが、ちやのはまき、つげのめいが
- (3) Sitotroga type: うが、はくが、しろしたほたるが、ひとつめかぎば、まつかれは、あかたては
- (4) Guidocampa type: いらが、くすな
- (5) Neope type: きまだらひかけ、もろしろてが、あげは、さかはちとがりば、おびが
- (6) Oophonodes type: おおすかしは、じまきしやすほこ、うめえだしやく、いぼたが

- (7) Bombyx type: おおみのが、かひこが、はらつひとり、まひまひが
- (8) Britlys type: ひとりが、はまおもとよたう

4 吐糸管の各型と營巢性を類別すれば次の如くである。

- (1) 樹幹中に營巢し營繭せざるもの Phassus type
- (2) 地上に營巢し營繭稀なるもの Neope type
- (3) 地上に營巢し營繭するもの (a) 不完全繭を營むもの Hypomoneta Sitotroga type (b) 完全繭を營むもの Guidocampa type, Bombyx type
- (4) 地中に營巢し營繭せざるもの Oophonodes type, Britlys type
- (5) 各吐糸管型と繭との關係を見るに不完全繭を營む Hypomoneta type と Sitotroga type には繭層に體毛、葉片等の外物を混するが、完全繭を營む Guidocampa type, Bombyx type には繭層に外物を混すること少く、厚く固化して強靱となり、豫め脱出孔を設けて羽化に備へるものが多い。
- 6 吐糸管は吐糸口縁の可動程度により、次の可動口式と固定口式とに分けられる。一般に前者に屬するものでは絹絲は扁平となり、絲膠は多量で、形は多様である。然るに後者に屬するものでは、絹絲は圓味を帯び、絲膠は比較的少く薄膠狀を成し絲質を被覆してゐる。
- 可動口式: Guidocampa type, Oophonodes type
- 固定口式: Phassus type, Hypomoneta type, Sitotroga type, Neope type, Bombyx type, Britlys type

7 鱗翅目幼虫に於ける吐糸管の八型

の相互關係を考察するに毛翅目幼蟲の原始型を根幹として Phassus type に分化し茲に於て Guidocampa-Complex と Bombyx-Complex とに分派し、前者に於ては Hyponomeuta type, Neope type を經て Britys type 及び Guidocampa type に發展し、後者に於ては Stotanga type を經て Cephalodes type へ Bombyx type とに發達せるもの如く思はれる。

二、吐絲機構

- (1) 吐絲管複合體は變位的と定位的の二器官運動を行ふ。前者には諸種の胸筋が關與し、頭部と夫れに連る第一環節の間膜は其の運動を固滑にさせ、且つ、運動域を擴張するに預つて力がある。又、後者には各一對の下唇下顎筋、下唇下顎直筋及び下唇下顎斜筋が關係するが、吐絲管の器官運動には主として基管部の間膜が關與する。
- (2) 整絲區の硬皮桿は吐絲量の調整を掌り、又、吐絲區の紡績漏斗は絲綫を整へ接絲を容易ならしめるに役立つもの如く思はれる。
- (3) 熟蠶の第一氣門を通じて吐絲要部に物理化學的刺戟を與ふるときは絹絲の人工吐出を容易に行ふことが出来る。
- (4) 絹絲蟲より直接絹絲ヲ繰絲スル方法』(特許第一四二二三八號)
- (5) 家蠶の人工吐出絹絲は自然吐出絹絲の性状に比し、原單絲は密着し、絲質及び絲膠の形態は均整となり、殊に絲膠は薄膜狀を成し光澤を増す、又、自然吐出絹絲の吐絲速度と略々同じ速度にて牽引吐出せしめたものでは、織度は夫れより細くなるが最大強力と伸度の性質は劣ると認められない。
- (6) 絹絲の形態は吐絲の方向により異

り、前方牽引による人工吐出絹絲は織度太く、類節は概して少く且つ、小形である後方牽引によるものでは摩擦抵抗は前方牽引より大きく織度は細まり類節は多くなる。又、側方牽引に於ては摩擦抵抗は最大で織度は最も細く、殊に一侧の原單絲には處々に絲質の大顆粒を着生して顯著なる類節を形成する。

- (7) 吐絲の時期による繭絲の形を觀察するに前期(檢尺器二九九回以下)では細く、中期(三〇〇—四九九回)の初めに於て最も太くなり、爾後は漸減して終期(七〇〇回以上)に至り最小となる人工吐出絹絲にても略々同様である。
- (8) 一侧の絹絲腺に外傷を加へると、それより吐出する原單絲は細まり、屢々他の原單絲に纏綿する。又、一侧の絹絲腺を摘出すると、絲質と絲膠とは不規則な配列状態を呈する。
- (9) 絹絲の不定位な局部的形態變化は吐絲口の形態、硬皮桿の状態、吐絲接着面の性状、吐絲中の絲體の弛緩及び吐絲の方面等に依り左右され、緩慢で定位的な全體としての形態變化は絹絲腺の内部分壓力に依り支配されるものと考へられる。
- (10) 絹絲は蠶自體の牽引作用のみならず、絹絲腺の内壓に基く吐出作用に依つて生成されるものと思惟される。

中島茂氏略歴

本籍 長野縣下伊那郡川路村二六三番地
 昭和三十二年四月 上田蠶絲專門學校養蠶科本科卒業
 昭和三十二年十一月 同 助手
 昭和三十二年七月 同 教授
 昭和三十二年四月 宮崎高等農林學校助教
 昭和三十二年四月 宮崎縣青年學校教員養成所教授囑託
 昭和三十二年四月 文部省第三折衝訓練所講師
 昭和三十二年四月 文部省内地研究ヲ命ゼラレ東京帝國大學農學部ニテ一年研究
 昭和三十二年三月 文部省ノ命ヲ被リ、陸、海、外務三省ノ指令ニ依り、海南島、佛印、泰、馬來、昭南島、ジャワノ動物調査ニ出張八月歸國農學博士ノ學位受領
 全 十七年三月
 全 十六年三月
 全 十四年四月
 全 十二年七月
 全 十七年九月



科學點描 (6)

現在發見されてゐるビタミンには次の様なものがあり、其の効用も異なる。

種類	効用	所在
A (カロチン)	抗眼疾、抗傳染性、成促進	肝油、卵黃、魚油、ホーレン草
B1 (オリザニン)	抗脚氣、抗神經炎	入麥、トマト、酵母、糠、卵黃
B2 (フラビン)	成長促進	トマト、酵母、牛肝臟、牛乳、卵白、ホーレン草
B3 B4 B5 及 B6	何れも B2 に類似してゐる。	白、ホーレン草
ニコチン酸	抗ベラグラ	酵母、牛肝臟、米糠
因子	維の皮膚炎防止	酵母、牛肝臟

燈火管制とビタミン

敵機の夜襲にそなへる嚴重な燈火管制下に於て國民保健上最も大切なものはビタミンである。之れが欠乏すれば夜盲症その他眼疾を起し細菌に犯され易くなる。ドイツに於て燈火管制下に於いて、手ざりしたり、街燈に突きたつたりして難儀する等、明かにビタミン欠乏症とみなすべき人々が少なくなつたと云ふことである。バター、全乳、チーズ、肝臟食、カロチンを含む新鮮な野菜等を食してAの補給を圖ることは戦時下の日本に於ても必要であらう(科學畫報より)

鶏卵の新古鑑定法
 卵の新古をみるには色々な方法があるが、もつとも信用のおけるのは比重の測定である。これは小さなハカリがあれば誰にも出来る。即ち空氣中で測り、次に細い生絲か髪の毛で縛つて水中で測る。次式によつて比重を求め

種類	効用	所在
C (アスコルビン酸)	抗壞血病	レモン、唐辛子、大根汁、果物、蔬菜、綠茶
D (エルゴステリン)	抗佝僂病	肝油、卵黃
E (トコフェロール)	抗不妊性	大豆油、米麥の胚子
F (リノール酸)	皮膚因子	大豆油、玉蜀黍油
JH	抗肺炎	牛肝臟、酵母、レモン油
K	抗出血性	豚肝油、トマト
L	催乳因子	甘藍
P	血管不滲透性因子	牛肝臟、酵母、レモン油

この方法の子供でも出来、たまに少量づゝしか卵の配給を受けない最近の家庭科學としてもつてこいものと思ふ。(朝日から)

培養中の豆
 培養中の豆の数を、即ち比重が1.09位だと生み立てて卵であり、眞夏は一日平均1.0002位宛比重が減るから、1.07は十日位経つたもの、1.05は二十日位経つたものといふこととなる。眞夏は貯藏法にもよるが二十四、五日経つと腐る心配があるから1.05以下のもは惜しいと思はないで早く食べることである。

第三十回卒業證書授與式舉行

戰時體制下、卒業期六箇月の繰上げ實施から母校の第三十回卒業證書授與式は去る九月十九日午前十時より講堂に於て來賓並に父兄多數臨席の下に舉行された。特に今期は新設纖維化學科の第一回の卒業をみたわけて、此の點意義あるものであつた。

式は國歌奉唱、宮城遙拜、英靈に感謝獻詞、皇軍武運長久祈願に始まり、各科卒業生修業生氏名を呼名し各科總代(養蠶科小林敏夫君、製絲科宇津良三君、絹紡織科小泉正衛君、纖維化學科小林三郎君)に夫々校長より卒業證書を授與、更に實業教育振興中央會(會長橋田文部大臣)表彰狀を全卒業生中最優秀者製絲科宇津良三君へ、又本會よりの針操賞を各科優等生小林敏夫(蠶卒)細田哲郎(絲卒)小泉正衛(紡卒)小林三郎(化卒)の四君へ授與された後續いて井上校長の次の如き式辭があり、次いで橋田文部大臣祝辭並永安縣知事祝辭の代讀、來賓より淺井上田市長、中等學校代表丸農校長、實業家代表笠原善吉氏、千曲會代表勝又藤夫氏等の祝辭があり、引續き祝電祝辭の披露、在校生總代柳澤千代茂君(化二)の送辭、卒業生總代小泉正衛君の答辭があり、最後に校歌を合唱して殿かに閉式した。

井上校長式辭

本日茲に第三十回卒業證書授與式舉行スルニ當リ、文部大臣閣下ヨリ祝詞ヲ賜リ且ツ朝野貴賓各位ノ責臨ヲ辱ウシタル、洵ニ本校ノ光榮トスル所デアリマシテ又深ク感謝スル所デアリマス。

諸子ハ入學以來能ク校規ヲ守リ校訓ニ遵ヒ精勵努力シタル結果今日ノ榮冠ヲ勝テ得タルモ、テアツテ我等職員一同ハ洵ニ欣喜ニ堪ヘヌ所デアル、尙ホ諸子今日アラシメタル父兄各位ノ多年ニ於ケル丹精ヲ想ヒ諸子今日ニ於ケル成年ニ見テ諸子ノ父兄ノ御満足御安心ハ如何許リナランカト御察シ致シテ吾々ハ心ヨリ御祝ヲ申上グル次第デアリマス。

- 本日卒業並ニ修業證書授與ノ光榮ヲ擔ヘルモノハ
- 養蠶科 三十二名
 - 製絲科 二十六名
 - 絹紡織科 二十六名
 - 纖維化學科 三十名
 - 選蠶科 一名
 - 大學進學見込者 五名
 - 製蠶科 三名
 - 絹紡織科 二名
 - 纖維化學科 四名
 - 合計 一二九名
- テアリマス

多年登雪ノ功成リ本日日出度卒業並ニ修業ノ榮譽ヲ荷ハレタル諸子ニ對シ惜別ノ辭ヲ述ブレコトヲ得ルハ余ノ衷心ヨリ喜ブ所デアル

其ノ鴻恩ニ對シ報恩感謝ノ念ヲ深メ十分ノ孝養ヲ盡サナケレバナラヌ、更ニ過去ノ學窓生活ニ於ケル鴻大ナル師ノ恩、友人ノ誘掖、先輩ノ指導等幾多ノ恩恵ニ對シテ數々ノ感謝ヲ捧ゲナケレバナラヌ、此ノ如ク想ヒ到レバ諸子今日ノ光榮ハ諸子自ラノ辛苦ノ結果ニシテマラズ、國恩ヲ始メテ親ノ恩師ノ恩等幾多ノ恩澤ノ致ス所デアルコトヲ能ク反省シ感恩崇敬ノ誠ヲ以テ自ラノ私欲ヲ去リ公ニ奉シテ正シキヲ行ヒ大義ノ爲メニハ身命ヲ賭スルノ尊キ精神ヲ發揮シナケレバナラヌ、又孝トナルノテアル、諸子ガ學窓ヲ出テ、實社會ヘノ首途ニ當リテ特ニ心構ヲ新ニセンコトヲ切望スル次第デアアル。

大東亞戰勃發以來九ヶ月有餘皇軍將兵ハ幾多ノ艱難辛苦ヲ克服シ力戰奮闘、大御機威ノ下未曾有ノ大戦果ヲ收メ世界ノ人々ヲ驚愕セシメツ、アリ、カクシテ米英ノ戦力ハ決定的ニ低下シ米國ノ殘存海軍ガ僅カニ南太平洋上ニ蠢動ノ餘地ヲ餘スノミニ到ツタデアアル、米英ハ太平洋上ノ諸要點ヲ喪失シ對日攻撃ノ企圖ハ不可能ニナツタト謂ヒ得ルノ於ケル我此ノ如クシテ太平洋及印度洋ニ於ケル我戰略態勢ハ鐵壁不敗ノ固キヲ加ヘツ、アルノケル建設工作ハ著々其ノ歩ヲ進メツ、アリ、此ノ時ニ當リテ諸子ハ學業ヲ卒ヘテ活社會ニ出テントスルノデアアル、諸子ハ深ク此情勢ヲ認識シ優渥ナル聖旨ヲ奉戴シ我が陸海軍將士ノ決死的奮闘ニ對シ深キ感謝ヲ捧ゲ護國ノ英靈ニ對シテハ深厚ナル敬仰ノ意ヲ表ハシ大戦時局下ニ於ケル卒業生トシテ特ニ奉公ノ誠ヲ致シ各其ノ業務ニ奮勵努力スベキデアアル、諸子ノ大部分ハ召サレテ兵役ニ服シ或ハ征戰ニ從フノ光榮ヲ擔フモノモ少クナイノデアアル、諸子ハ常ニ強健ニシテ勇躍軍務ニ服シ本校ニ於テ鍛鍊セラレタル精神ヲ充分發揮シ身命ヲ君國ニ捧ゲ國難克服ニ邁進スベキデアアル、諸子ニシテ軍ニ從フモ或ハ日常ノ職務ニ就クモ常ニ此覺悟ト決意トヲ以テ眞ニ不撓不屈ノ

努力ヲ致サナケレバナラヌ、諸子ハ常ニ正道ニ立脚シ思想ヲ堅實ニシテ禮節ヲ重ンジ謙讓ノ徳ヲ守リ以テ人格ノ向上ニ努力シナケレバナラヌ、將來指導ノ位置ニ立ツベキ諸子ニ於テハ高潔ナル人格ハ最も必要ナル所デアアル、諸子ガ本校ニ於テ専門ノ學術ヲ修得シタリト謂フモ單ニ基礎知識ヲ學ビタルニ過ギナイノデアアル、學術ノ進歩ハ實ニ急速ニシテ測リ知リ難イノデアアル、諸子ハ多忙ナル社會生活ノ裡ニアリテモ常ニ時間ヲ割イテ勉強研究ヲ進ムル様ニ心掛ケナケレバナラヌデアアル、殊ニ現下ニ於ケル如ク蠶絲ガ外需ヨリ内需ニ轉換シ是レニヨリテ蠶絲業ノ各部門ニ於テ其ノ目的ニ從ヒ大ナル變換ヲ爲シツ、アル今日諸子ハ一層奮勵努力シテ蠶絲業ノ各方面ニ涉リテ研究改善ヲ行ヒ國富ノ増進ニ資セナケレバナラヌデアアル、是レ實ニ國家ガ諸子ヲ養成シタル鴻恩ニ酬ニル所以デアアル、諸子ハ常ニ自ラノ長所短所ヲ反省シ其長所ハ是レヲ伸バシ其短所ハ是レヲ矯ムルニ努メナケレバナラヌ、而シテ事ニ當リテ功ヲ急ギ或ハ焦慮スルコトナク尚ホ能ク下積ノ勞苦ニ堪ヘ身ヲ挺シテ難局ニ當リ隱忍自重以テ職分ニ勵ミ切磋琢磨勉メテ儘マズ實力ヲ蓄ヘルコトガ將來大ニ成ス所以デアアルコトヲ深ク考ヘナケレバナラヌ、諸子ハ此心構ヲ以テ自奮自勵明湖淵遠ノ氣象ヲ養ヒ能ク人ヲ容レ熱慮斷行至誠ヲ以テ終始スルコトガ將來大事ニ成功スル所以デアアルコトヲ深ク慮ラナケレバナラヌ、淺間山ハ東天ニ聳エテ噴煙晝夜ヲ分タズ諸子ノ活動ノ精神ヲ教ヘ千曲川ハ清流酒々トシテ千古止マズ諸子ニ高潔ト不斷ノ努力トヲ示シテ居ル、諸子ハ母校ト別レルニ當リ懷シキ母校ト大自ラノ尊キ教訓トヲ終生志レテ母校ニ於テ養ハレタル精神ノ發揚ニ努力セラレンコトヲ望ミテ止ミマセン、茲ニ諸子ト別レルニ當リ諸子ノ前途ヲ祝福シテ成功ヲ祈ル次第デアアル、昭和十七年九月十九日、上田蠶絲專門學校長、井上柳梧

第三十回卒業業者氏名

- 製糖科本科卒業業者(三十二名)
 秋山富士男(静岡) 雨宮象二郎(長野)
 池田元吉(静岡) 久保田康夫(長野)
 見田秀夫(富山) 小池泰正(長野)
 小林敏夫(長野) 佐藤秀夫(長野)
 鹿間茂行(長崎) 塩田勤(長野)
 戸谷貞行(長野) 中島藤衛(長野)
 永井俊一(京都) 永淵淳(佐賀)
 西川正徳(香川) 林邦治(徳島)
 廣井周一(福島) 福川義一(栃木)
 本多孝(兵庫) 宮下豊次(長野)
 宮澤芳雄(長野) 三輪勝美(長野)
 三宅武夫(岐阜) 山口秀一(長野)
 兩角賢治(長野) 山下昇(三重)
 山崎千春(長野) 山部金三郎(岡山)
 山中明(栃木) 山部金三郎(岡山)
- 製絲科本科卒業業者(二十七名)
 石橋渡(福岡) 泉田和(長野)
 梅崎正道(福岡) 宇津良(石川)
 江崎勝(福岡) 太田宏(石川)
 萩野真之(静岡) 兒玉忠雄(東京)
 後藤則孝(長野) 酒井裕(山形)
 清水文雄(長野) 社領丈夫(大阪)
 高淵浩(岡山) 竹下昭三(石川)
 多勢一(山形) 西野正記(熊本)
 磯谷俊夫(岡山) 西野義雄(大阪)
 細田増郎(長野) 松尾好古(長野)
 渡邊敬一郎(大分) 船部甚藏(愛知)
- 製絲科選科修業者
 武井登(長野)
- 絹紡織科本科卒業業者(二十六名)
 赤藤壽雄(長野) 猪坂哲郎(長野)
 伊藤文郎(三重) 岩下功(長野)
 白田武雄(長野) 小川保男(長野)
 小田中直人(長野) 金井三喜夫(長野)
 船部正夫(栃木) 倉澤和夫(長野)
 倉部紀富(長野) 小泉正徳(長野)
 嵐ノ崎深(長野) 高橋順(長野)
 田中製袋雄(長野) 千島宇龜夫(大分)
 新村淳二(静岡) 西澤義一(長野)

(五十番順) 括弧内は出身縣

- 二宮新治郎(長野) 深澤武(長野)
 松田茂(長野) 宮島勝美(長野)
 宗田善敬(福島) 矢島五郎(長野)
 山上三義(滋賀) 山本邦夫(静岡)
 織維化學科本科卒業業者(三十名)
 天野定夫(静岡) 江西晴雄(兵庫)
 小池保義(長野) 小西秀雄(滋賀)
 下村龍(兵庫) 佐藤健次(香川)
 高見澤良夫(長野) 田口赫郎(長野)
 竹森克巳(岐阜) 中村信雄(長野)
 西澤創(長野) 西田謙三(大阪)
 藤井福松(新潟) 丸田忠秀(鹿児島)
 宮尾憲治(長野) 丸田豊(長野)
 宮島重一(長野) 柳生圭司(長野)
 矢崎豊(山梨) 山田良介(高知)
 山内信和(大阪) 山田信福(高知)
 龍竹璋夫(兵庫) 米勢皓穂(高知)
 和田米勢(明(廣島)以上)

隨筆

いちい風景(其二)

確永 茂

私の満蒙開拓館へは、いろ／＼な人達が集つて来る。集つて来る人達は、何れも海外發展といふものに大きな眼をみはつてゐる。

北方の滿洲へ行きたいといふものもある。赤道直下の熱帯へ行きたいといふものもある。中にはニューギニアや濠洲あたりへ飛躍したいといふものもある。

私はこれら人達に接するたびに、北でも南でも、ドシ／＼日本民族を海外へ發展させることの念を説いてゐる。

農村の人達には、日本の農家戸数は差し常り半分にしる、といつてやる。すると、「無鐵砲なことをいふ」といつたやうな顔をするから、

「いま日本の耕地は別は一農家當り一町歩ほどしかない。これでは百姓らしい百姓をやることが出来ない。最低二町歩平均なければならぬ。有畜農業といつても農家で家畜を飼ふことをどんなにするか。飼料を生産する土地がないではないか。そこで、家畜を飼育すれば、結局飼料を他に依存しなければならぬ。今回の戦争が開始するまでは、家畜の飼料を滿洲及び英國の植民地から輸入して、漸く辻妻を合せてゐるといふ有様であつた。ところが今度の戦争でパツタリ来なくなつて家畜が飼へないといふ。これでは本當の農家といはれない。苟も家畜を取り入れるためには、自家に於て家畜の飼料を自ら生産しなければならぬ。家畜の飼料を生産するためには、生産するための土地がなければならぬ。ところが現在の日本の農家は、その土地がない。だから本當の農家は、その土地を二町歩位はなければならぬ。」

と、分村計畫の必要を説いてやる。すると、わかりましたといふ。ところが、わかるにはわかつて、これを實行に移す人が誠に少ないので閉口してゐる。

こんなことをいつてやる。この人達にはこんなことをいつてやる。

「新潟市は現在十六萬の大人を擁する都會であるが、私はこんな大きなものは必要だと思つてゐる。この三分の一か五分の一で澤山だ。人間がウ／＼して居り過ぎる。だからロクなことがない。その大多数は商人だが、その商人が實に多い。こんなにいらぬ。グツと減らして差支ない。いや減少させなければならぬ。」

「いや、いまになつても闇が絶えないといふ一つの理由は商店が多く、配給機構が複雑過ぎるからである。東京市では日支事變の始まる直前、普通の家六戸に對し、商店が一戸あつた。どんなに東京で、地方相手の商人があつたといつてもこれで多過ぎる。聞けば新潟では普通の家四戸に對して商店が一戸の割合になつてゐるさうだが、これは實に多過ぎる。どう考へて見ても多過ぎる。モット／＼減少させなければならぬ。減少させたものは第一に大東亞共榮圈唯一の戦士として海外へ送り出し、體力或は能力に於て、海外發展に不適當なもの他は國家の重要産業方面へ振り向けてやる。従來、市町村長といふ人達の中には、自己の市町村の人口の増加することを喜んでゐるものが多かつた。いや大部分がそれであつた。いまでもそんなことを考へてゐる市町村長があるやうだが、こんな市町村長は舊體制の市町村長だ。新體制の市町村長は如何にして自己の市町村の人口を合理的に減少させるかに熱心であるべきだ。」

いま新潟市では轉業開拓村(二百戸程度)のものに滿洲へ作りたいといつてゐるが大いに僕も賛成である。この國家時に重大な仕事に眞剣になつてかかつて頂きたい。」

かうして、農家の人達や商家の人達に眞剣な話をすると、これら人達は何れも眼を見はつてゐる。中には「そんなことが出来るものか」といつた顔をしてゐる人もあれば、「それは是非やらなければならぬ」と、いつた顔をしてゐる人もある。

私は昭和十五年四月以來新潟へ来てゐるが、近頃は新潟に知人が澤山出来て非常に愉快である。(完)

(昭和十七年七月二十六日記)

母校便り

野外教練

一學年生は九月二十四日より三十日迄一週間、野井澤附近に於て、二年生は十月五日より十一日迄新鹿澤に於て野外教練を行った。

小松教授滿洲、支那へ出張

絹紡織科小松忠一郎教授は資源調査のため約三ヶ月の豫定で九月二十一日朝鮮、滿洲、中華民國へ向け出發された。恙なく調査を終へられんことを祈る。

野口教授歸校

絹紡織科野口新太郎教授は七月より約三ヶ月間東洋紡研究所、富士紡に調査研究のため出張中であつたが、九月三十日元氣で歸校された。

松高と射撃試合

射撃班は諸兄の熱援に送られ去る八月三十日、松本陸軍射撃場に於て松本高等學校と試合しましたが、残念にも四十五點の差を以て敗退、選手一同奮闘練習を重ね明年こそは必ず立派な成績を揚げんと誓ふ。

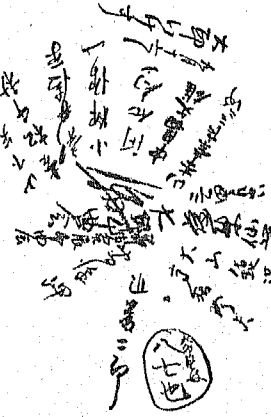
小林敏講師退職される

昭和十年三月母校養蠶科卒業と同時に養蠶部に殘られ爾來孜孜として指導に精勵されてゐた小林敏氏は御家庭の都合の爲、九月三十日付で母校を退かれた。緻密な頭腦と溫和に加へて藝術的天分を持つて馴染まれた氏の引退は七ヶ年の久しきに亘るだけに一抹の淋しさを與へる。氏の油繪の巧みは特筆されるべきもので母校に開かれる例年秋の甘茶美術展覧會には其の技を誦はれ訪ふ人々の眼をみはらしたものだつた。住み慣れた母校を後にする氏の感傷も又一しをならんと思はれる。此の上は御自愛なされ就後の御奉公に、御自家の御繁榮に益々盡されんことを祈つて已まない。(學生)

地方通信

大邱千曲會臨時總會記

當大邱府は産蠶額に於ても生絲の生産及消費額に於ても全鮮の玉座を占める蠶業道慶及北道の首都である。従つて官廳會社に勤務する同窓も仲々多く郡部に在勤の方々を合すれば、ざつと二十名となり大邱府内に於ては、現在道廳に中島兄弟蠶業取締所に大崎、小柳兩兄、道原蠶種製造所には後藤、新井、首藤の三名、大邱農林學校に近藤、新井、首藤、邱紡織工場に山本、河西、山下、吉松、宮澤、大山各兄、新興製絲大邱工場に三ヶ田、森兩兄、朝鮮生絲に高松兄の十六名が控へて居ら



れるが、中約半数は最近の轉入者であるので御互の顔繋ぎの必要もあり、且つ時局下職域泰公の誠を致す爲にも連絡を密にし、大いに元氣でやる必要があるので九月十六日午後六時より大邱いけす料亭に於て大邱千曲會(假稱)臨時總會を開催した次第である。集まる者前記十六名中應召中の首藤、森兩兄を除く十四名であつたが、何れも一騎當千の元氣者許りの事としてアルコールも遙かに豫定を超過し、歌ふ、踊るの盛會で若きは三年、古きは十五年二十年の背に若返つて十二分の歡を盡し母校の發展と恩師の御健康を祝して乾杯し引上げたのは制限時間ぎりぎりだつた。(寄書は其の時のもの)(後藤記)

本會記事

九月十一日 理事會開會第三回總會開催の件協議す

九月十四日 新入會員歡迎會開催す
九月十五日 母校卒業證書授與式に參列す
九月二十五日 千曲會報第二十號發送す

支會役員異動

鹿兒島千曲會に於て九月二十六日支會總會開催左の通役員改選せり
會長 櫻井 吉利
副會長 合田 信一
幹事 安田 辰巳
同 山崎 通雄
滿洲千曲會に於て九月二十三日支會總會開催左の通役員改選せり
會長 今井 衷
副會長 山本 岩三郎

遠藤先生退官記念品贈呈資金受領報告

十月五日 在
金參圓也 蒲生 俊興
右合計金參圓也
累計金八百圓也

會費領收

十月五日 在
入會金納入者
三宅 武夫(蠶三〇)
兩角 賢治(蠶三〇)
田中 泰久(蠶三〇)
千島宇龜夫(紡三三)
金拾圓也 山下 昇(蠶三〇)
昭和十七年度會費金四圓也
大澤 賣市(蠶二〇) 村田 一由(蠶二〇)
濱井 成一(蠶三〇) 内藤 康三(蠶三〇)
山田 次男(蠶三〇) 木内 庸一(蠶三〇)
工藤 榮次(蠶三〇) 目崎 正夫(蠶三〇)
上野 義一(蠶三〇) 富田 乙松(蠶三〇)
明倉 美義(蠶三〇) 望月 太一(蠶三〇)

山口 伊祐(絲二〇) 中尾 知則(絲二〇)
中村 壽惠男(絲三〇) 久保井左武郎(絲三〇)
宮本 靜雄(紡三〇) 湯原 淳(紡七〇)
山内 龍一(紡七〇) 木曾 信雄(紡二〇)
諸岡 市郎(紡二〇)
昭和十八年度會費金四圓也
古川 俊之(蠶三〇) 中村 壽惠男(絲三〇)
細田 増郎(蠶三〇) 山下 昇(蠶三〇)
宮下 豊次(蠶三〇)

終身會費納入者
荒井 猛(絲三〇) 三宅 武夫(蠶三〇)
千島宇龜夫(紡三三)
未納領納入者
金拾貳圓也(昭和七、十五、十六年度分)
木曾 信雄(紡二〇)
金八圓也(昭和十五、十六年度分)
濱井 成一(蠶三〇)
金八圓也(昭和十三、十六年度分)
金丸 功(絲三〇)
金四圓也(昭和十六年度分)
山田 次男(蠶三〇) 河田 泰(蠶三〇)

準備費納入者
金壹圓六拾錢也(昭和十六、十七年度分)
村尾はつ江(教八)

社団法人千曲會 第三回通常總會通知

來る十一月二十二日午前九時より母校内千曲會館に於て第三回通常總會を開會致します。
支會長各位には管内代議員に御出席下さる様御配慮御願申上げます。
而して御參會下さる各位の御氏名前以て本會迄御通知願ひます。
昭和十七年十月
社団法人 千曲會

叙任辭令

現職員之部

上田蠶絲專門學校教授 小泉 所
 九級俸下賜(八月三十一日)
 正七位 柳澤 延房
 同 大平 敏彦
 敝從六位(七月十五日)
 上田蠶絲專門學校教授 小松忠一郎
 滿洲國及中華民國(出張命令)(九月十九日)
 文部屬 岡田 準次
 任上田蠶絲專門學校教授、敝高等官六等
 九級俸下賜(九月二十三日)
 從四位 佐藤 利一
 敝正四位(九月一日)
 卒業生之部
 農林技師 沖 壽治
 神戸輸出生絲登錄所長事務取扱命令
 蠶絲局出納命令、歳入徴收、分掌官命令
 (八月三十一日)
 公立實業學校教諭 小山 惠治
 八級俸當分千參百八拾圓下賜(八月十五日)
 從六位 小島 五郎
 同 曾山 直高
 敝從七位
 正八位 富田 乙松
 井上兵一郎
 正八位 渡邊 善次
 敝從七位(以上七月一日)
 農林技師 内藤 良雄
 同 瀧澤 芳樹
 任陸軍技師、敝高等官七等(九月十日)
 從七位 尾藤 省三
 敝正七位(七月十五日)
 從五位 高須 兵司
 敝正五位(八月一日)
 公立實業學校教諭 糟谷遠三樓
 願ニ依リ本職ヲ免ズ(九月十六日)

同

七級俸當分千六百貳拾圓下賜(七月三十一日)
 茨城縣立太子農林學校教諭 周崎 勘助
 栃木縣立宇都宮農林學校教諭 高橋 池一
 公立實業學校教諭ニ任ス、高等官七等待遇、
 右同校教諭ニ補ス(九月二十三日)
 從五位 沖 壽治
 敝正五位(九月一日)
 地方農林技師 荻原 孫三
 石川縣農林技師ニ補ス(九月二十五日)
 伊藤 喜代
 敝從七位(八月十五日)
 長野縣東筑摩農林學校教諭 和田 利彰
 公立實業學校教諭ニ任ス、高等官七等待遇、
 右同校教諭ニ補ス(九月二十六日)
 地方農林技師 土屋 孝
 地方待遇職員令第十一條ニ依リ休職命令ス
 (九月二十五日)
 公立實業學校教諭 吉野 健吉
 六級俸當分千七百八拾圓下賜(七月二十二日)
 同 野澤 泰治
 四級俸下賜(八月三十一日)

本校辭令

藤田 清司
 御用濟ニ付囑託ヲ解ク(九月二十五日)
 齋藤 敬師 囑託 土屋 勝平
 副手兼講師 小林 敏
 願ニ依リ副手ヲ免シ兼講師囑託ヲ解ク(九月三十日)
 掛 炳 照
 副手兼講師 製絲科勤務命令(九月三十日)
有志弔慰金に對する遺族よりの禮狀
 九月十六日 新潟市二葉町三丁目 故宮田 皓氏 父 宮田 吉松
 九月十七日 宮崎縣高千穂町 故迫 繁氏 母 迫 松榮

計報

弔慰金募集
 故渡邊善次氏(諱廿三)
 對し弔意金を募集の上十月末日迄に取
 り纏め御遺族へ贈呈致したいと思ひますか
 ら夫れに間に合ふ様振替口座東京四三三
 四一番へ同君に對する弔慰金の旨御記入
 の上御拂込下さい。
 昭和十七年十月
 干 曲 會

弔慰金報告

(十月五日)
 故土屋久雄氏弔慰金 衛
 右合計金貳圓也 谷澤
 累計金貳拾五圓也
 故飯田省三氏弔慰金 科晃
 右合計金八圓也
 累計金拾八圓也
 故古郡友一氏弔慰金 重雄
 右合計金五圓也 三浦
 累計金七圓也
 故渡邊善次氏弔慰金 勝夫
 右合計金六圓也 坂本
 累計金六圓也 竹内 好武

會員名簿號發行豫告

千曲會會員名簿は来る十一月一日現在にて千
 曲會報第二十二號、會員名簿號として發行の
 豫定であります。就きましては千曲會報に未
 報のものには此際至急千曲會宛御一報下さい
 因に通知事項は次の様にお願ひ申します。
 氏名。勤務先並にその所在地。現住所。本
 籍地。職名。卒業年次。移動年月日。電話
 番號。公用の場合は留守宅及び家事擔當者
 等。
 次に各支會長に特別お願ひ申します。若し
 支會の會員名簿が出来て居りましたならば此
 際支會部至急御送附下さい。

御挨拶

時下殘暑の折柄益々御清祥の段奉賀
 候者私宇都宮農林學校在職中は公私共に一方
 ならぬ御懇情を辱ふし衷心感謝致居候
 今般退任に際し御懇情を辱ふし衷心感謝致居候
 の上御指授の程願上候間何卒今後一層
 先は不取敢御挨拶申進度如斯御座候 敬具
 昭和十七年九月
 福井市佐佐木中町一〇二
 日本蠶絲統制株式會社
 福井出張所
 糟谷遠三樓

御挨拶

謹啓時下爽冷之候益々御清祥之段奉賀候
 陳者不肖本春三月より彼命海南島 佛印
 軍當局の格別なる御援助を蒙り八月無事歸
 國仕候其の間は公私共に多大の御懇情を忝
 し寔に難有肝銘厚く御禮申上候時正時局
 重率公に邁進仕度候に就いては今後共
 一層御禮の程願申上候
 先は右御禮券々御挨拶申進度如斯御座候 敬具
 昭和十七年九月
 宮崎高等農林學校
 中 島 茂
 自宅 宮崎市神宮町
 一四ノ一

御挨拶

謹啓秋冷の候愈々御清祥の段奉賀候
 陳者私儀宇都宮農林學校在職中は公私共に一方
 ならぬ御懇情を辱ふし衷心感謝致居候
 今般退任に際し御懇情を辱ふし衷心感謝致居候
 の上御指授の程願上候間何卒今後一層
 先は不取敢御挨拶申進度如斯御座候 敬具
 昭和十七年十月
 長野縣小縣郡和村
 小林 敏

會員動靜

(九月十日現在)

- 太田 光 (蠶元) 爪哇派遣海八四四部隊本部(九月三日)
- 山田 次男 (蠶元) 橫須賀海軍工廠機關實驗部第四科(住)橫須賀市深田町二七一熊澤方(九月四日)
- 堀江 誠 (蠶元) 金澤市上安藤町四、吉川方(八月)
- 北原 幸治 (蠶元) 本校纖維化學科與研究室(住)長野縣埴科郡杭瀬下村大字新田四三七
- 大西 三郎 (蠶元) 函館郵便局私書函五六號(八月三日)
- 竹下 清 (蠶元) 東部六三部隊(八月二三日)
- 城口 俊明 (蠶元) 東部六三部隊(八月二三日)
- 鈴木 文一 (蠶元) 東部六三部隊(八月二三日)
- 片山 文一 (蠶元) 東部六三部隊(八月二三日)
- 遠藤 文平 (絲一) 日本蠶絲統制、德島出張所、技師(德島市船場町)(住)德島縣名西郡石井町一五三(八月二日)
- 土岐 宣治 (絲一) 鐵道絲組合(高知縣香美郡片地村)(八月一日)
- 中川 照 (絲三) 開明絹織株式會社(岡谷市三二六四)電話、岡谷三〇三六一三〇三七(九月三日)
- 森山 二郎 (絲四) 東京市杉並區成宗一ノ四三(通信先)(八月二日)
- 橋本 景吉 (絲四) 日本蠶絲統制、前橋事務所(前橋市南曲輪町七〇)電話三三三〇(住)高崎市昭和町一九二電話六二二(八月二日)
- 小笠原 振一 (絲四) 日本蠶絲統制、甲府生絲檢査所(甲府市山田町一九)電話三〇八九
- 笠嶋 金治郎 (絲六) 片倉製絲紡績株式會社(東京市京橋區京橋三ノ二)(八月四日)
- 中野 保忠 (絲六) 日本蠶絲統制、甲府生絲檢査所(甲府市山田町一九)電話三〇八九
- 齋藤 監 (絲六) (住)甲府市橋近町三二
- 瀧澤 啓四郎 (絲七) 片倉、岩代工場(福島縣郡山市塩橋町一)
- 望月 太一 (絲七) 日本蠶絲統制、郡山第三工場(福島縣郡山市長者町)(八月一日)
- 水上 精一 (絲三) 片倉製絲紡績株式會社(東京市京橋區京橋三ノ二)(住)埼玉縣大宮市大字大宮一〇六五(八月一日)
- 竹内 正司 (絲三) 日本蠶絲統制、岡谷生絲檢査所(岡谷市)(住)岡谷市下濱三八二四(八月一日)
- 萩原 行雄 (絲三) 片倉、宮之城工場(鹿兒島縣薩摩郡宮之城町)(住)全上(九月二日)
- 林 英雄 (絲二) 東八日一 配屬將校(仙臺市片平町)(住)仙臺市土樋二九二(通信先)
- 今村 覺治 (絲三) 忠清南道蠶業取締所兼忠清南道農務課勤務、產業技手(八月二三日)
- 橋本 嵩 (絲三) 片倉、美濃工場(岐阜市辨天町二三)(九月七日)
- 藥師神辨太郎 (絲三) 滿洲榨蠶株式會社(新京市北安路六二二號)(住)新京市昌平胡同六〇四(八月十七日)
- 宮坂 三郎 (絲三) 宮城縣蠶絲課、技手(仙臺市)(住)仙臺市新野の町五七番地(六月二十五日)
- 日膳 咲一 (絲三) 片倉、盛岡工場(岩手縣盛岡市仙北町)(八月一日)
- 福場小四郎 (絲三) 召集解除(住)岡谷市花畑町三六
- 富永 暉 (絲三) 福井縣福井市有樂町(八月七日)
- 富永 暉 (絲三) 海軍航空本部、大阪海軍監督官事務所兼、神戸海軍監督官事務所(住)大阪市西淀川區花川町二二六海友莊(八月十七日)

(但シ末尾括弧内ハ移動月日又ハ通知狀切手消印)

編 輯 後 記

別記の如く第三十回卒業生を送り出した母校は今年二年の學生のみとなり、やがて入るべき渡りたる新入生を迎ふ特機の姿勢にある。巢立つたもの大部分は御國の爲に御奉公だ。軍國日本の總進軍である。

中島茂氏の學位獲得は氏の喜びであるばかりでなく、我々同窓生の驕事である。我が千曲會員の學徒の中より一人でも多く輩出したの榮譽のために。千曲會の發展のために又母校の榮譽のために。

唯水茂氏の隨筆は戦域に於て書かれた意義あるものである。各戦域に於て觀察された、云はる職域便りの御投稿も仰ぎ度いのである。(編輯室より)

滿洲三一八部隊(八月三日)
 北支 河三五六五部隊
 東部六三部隊佐藤隊(八月二三日)
 (勸) 從前通(住)橫須賀市油壺二八〇須山寅吉方(八月三一日)
 公用
 中部一三一部隊佐藤隊(留守宅)長野縣北安曇郡大町三三八諏訪安喜治(八月九日)
 仙臺陸軍教導學校
 仙臺一三四一電話岩國西三一(八月二六日)
 錦見一三三四電話岩國西三一(八月二六日)
 郡是、大邱紡績工場(住)大邱府七星町二〇(八月七日)
 (勸) 從前通(住)大阪府住吉區帝塚山中四ノ五(八月一七日)
 ビルマ派遣林五八六五部隊(八月三日)
 日立製作所多賀工場内鮎川工場(茨城縣多賀町成澤鮎川郵便局裏)九月八日
 鐘紡名古屋工場(名古屋市中村區箕原町二ノ六〇)(八月五日)
 鐘紡四日市工場(三重縣四日市市日永二〇〇)(九月六日)
 大日本紡績(住)岐阜市可兒郡廣見町石井(八月二九日)
 召集解除(住)岐阜市可兒郡廣見町石井(八月二九日)
 日本カラ紡績統制株式會社(岡崎市康生町九八番地ノ一)(住)愛知縣寶飯郡御油町五九(八月二日)
 東部四部隊本部
 大同毛織、龍野工場(兵庫縣揖保郡半田村)(八月一七日)
 佛印派遣四二四〇部隊(八月二七日)
 公用(留守宅)埼玉縣南埼玉郡粕壁町(八月二七日)
 名古屋市東區葵町三六(九月四日)
 上田市大町中吉太郎方(九月四日)
 舊姓、藤田(住)長野縣小縣郡和村栗林(九月四日)
 本校纖維化學科須田研究室(住)長野縣小縣郡神村山口(九月八日)
 長野縣小縣郡須田町六丁目(八月二六日)
 本校纖維化學科須田研究室(住)上田市銀治町四一九一(八月一七日)
 大陸科學院有機化學研究室(住)上田市大町(住)新京市豊順街二〇二第一甲子坂本ビル(八月二日)

戦ひ抜かう大東亞戰!

昭和十七年十月二十日印刷 (非賣品)
 昭和十七年十月廿五日發行

編輯兼 發行所 上田蠶絲專門學校内
 上田 市原町五七九五
 印刷人 倉長孝中 澤 二 郎
 印刷所 上田市原町五七九五
 印刷所 中澤印刷

發行所 上田蠶絲專門學校内
 社 團 千 曲 會
 法人 千 曲 會
 電話 上田四〇六番 六六一番
 電話 千曲 四三四番 三三三番
 電話 千曲 六三四番 三三三番